批評・紹介

梅原　郁著
宋代官僚制度研究

斯波義信

一

官僚制や官僚主義は、近年あらたな脚光を浴びつつある古くて新しい、しかもグローバルな比較の課題である。世界史のなかでも稀有の連續と均衡で特色づけられる中國の古典官僚制は、その社會の統合と進化のための決定因に預る廣義のテクノロジー（組織技術）の一基本要素と考えることもできるから、世俗の局面から文化スタイルや世界觀にいたるまで、これ抜きでは到底語れないし、裏返していえば、中國學の史料學自體が、その大宗をなす官人の記述を整理、洞察して最大限に活用することを抜きにしては、ほぼ成り立たないのである。

奇しくも一九八五、六年度には、宋代の官僚社會をめぐって、梅原郁博士の大册のほかに、J. W. Chaffee 博士の『宋代における學才の選拔（＝挾聞）』（ケンブリッジ大出版局）という科學の社會史研究、李弘祺博士 Thomas H. C. Lee の『宋代の公共教育と科擧』（香港中文大出版社）[1] また、Robert P. Hymes 博士の『ステイツメン　アンド　ジェントルメン』（ケンブリッジ大出版局）が一齊に刊行された。梅原氏の著は宮崎市定、佐伯富博士の學統を、チェイフィー氏の著はE・クラッケ博士、何炳棣博士の學統を、李氏の著はA・F・ライト博士の薫陶を、ハイムズ氏の著はR・ハートウェル博士の業を、それぞれ承けて成ったもので、學者二世代の心血を注いだ研鑽の結晶であるだけに、「問題史」としてのこの大テーマの深さ、重要さと魅力がわかるのである。本書および他の三著の出現で、宋代の社會文化史、制度史の研究や教育に攜る者のうける便益ははかりしれない。

二

それでは、なぜ官僚制が、そして宋代のそれが重要と映るのだろうか。これまでの中國研究の中心モティーフは、上は皇帝から官僚、紳衿、民へと上下に整然と貫通する「秩序階層の性質」への問いにおかれてきた。[2] こうした問いは、史家が對象社會（の史料）に親しんで引き出した第一印象に由來するだけに、自然な着想といえるのである。この分析イメージ、ことに專制政治の階層秩序についての洞察は、たしかにM・ヴェーバーによって巨歩を進められ、方法的にも妥當とされるが、[3] 反面、彼の依據史料が狹さと偏りで拘束されていることもあって、中國の內在發展に目が屆かず、その文化社會學が重んずる價値や動機にしても、有機的「動態」（コンジャンクチュアー）との脈絡を捉えようとせず、硬直的であるとの評がある。[4] このいみでは進化の諸劃期を積極的に取り上げ、なかんずく中間の改變期としての「唐宋の變革」との接合を考慮した內藤湖南、宮崎市定、E・クラッケ歴史家の着眼は、後續の問題地平の擴大をより容易にするものであった。

それにしても、なぜ中國のケースが連續と均衡を保てたのか、その制度保證はなにか、は依然として問いつづけられる設問なのである。新古典派經濟學の泰斗、J・ヒックス教授の一つの示唆によると、それは㈠文臣武臣の別、行政監察一般を含めた監察制の工夫、㈡新人登用機構および官人層の社會移動の工夫、㈢昇進制の工夫、のせいではないかという。[5] さらにこのタイプの「古典官僚制」は、單純に全く下からの慣習秩序でもなく、上からの（軍事）指令の秩序でもなく、そして兩者の混合型である點では封建制と並びつつも、封建制が慣習の優越で特色づけられるに比して、指令要素が相對的に卓越する。もし內外の「挑戰」という壓力が加わると、組織は指令に動くだろうが、それが收まると、惰性の法則、社會引力が働き、特定の職能やその特權を固定する力が生ずる、とされる。

かりに「動態」との接合の脈絡に目を配り、しかも上述のヒックスのいう「工夫」の性質と「挑戰」や「引力」に卽應する推移を考えて、この問題史を俯瞰すると、テーマの裾野は意外に廣く、たとえば、(a)官僚制と社會移動（家、富、才の相對比重）、(b)登用・昇進制と權力配分（選擧と獨裁、君權對貴族ないしエリート、中央對地方）、(c)メリトクラシーと才の測定（識字、學校、政治思想、專職對人文敎養）、(d)監視の制（文と武、慣習と指令、監察の機構）、(e)メリトクラシーの推移、等々が浮び上るのである。[6]

一方、『淸國行政法』、『支那官制發達史』から進んで、九品官人法、六典官制、科擧、政治思想、宋以後の官制、學校、書院、識字、鄕紳、監察、內務・司法・軍事・財務行政の具體硏究が長足に進化した今日では、不均一ながらも累積された事實關係は、例えばヴェーバー當時の水準とは隔絕している。しかし關心が擴大し個別分化すればするほど、個を全體にリンクする新しい展望が求められる道理である。硏究史が一樣にたどるこうしたジグザグの中で、新規の展望が事實のテストに耐えて生まれるに當っては、組織的で偏りのない情報源が公開されることを要し、そこに何らかの障害があれば、その克服が先決の前提になる。本書はまさしくその作業上の重要な里程標なのである。

三

ではなぜ宋代なのか。E・ライシャワー博士の觀照によれば、中國官僚社會が西ローマの轍をふまずに回生延命できたのは唐の修復に負っており、その一つの證據に三省六部官制の淸末までの持續が擧げられるという。[7] たしかにその通りではあるものの、梅原氏が指摘するように、十一世紀の元豐の改革も、漢より唐六典に達して成った三省六部の鑄型（＝社會引力）への整合と見えても、內實は換骨奪胎をへて、樞密院の溫存や宰相府への權限集中をはじめとする、新社會への適應が隨處に顏を見せ、變化と動き始めた惰性とのアマルガムの成果である。さらに、本書の冒頭で宮崎、梅原博士がいうように、二百年の大動亂の果てに現れた宋初の官制は、新舊の重複やズレを是認したまま、しかも王朝が新しい理念や政策の筋を通しつつ、微妙な調和をはかった所產であり、やがて元豐～宣和～南宋初の整理に收斂されて、明淸官制の祖型を成したのである。この錯綜、ことに宋初のそれ、こそが歷史の中での宋官制の眞に躍動的な相位であり、變革と持續の性質を解く手がかりを供するという梅原氏の指摘は、肯綮に當る至言であると認められる。

この洞察を轉じて具體知識にもたらすには、難解のゆえに敬遠さ

れがちであった『宋史職官志』を軸とする基本典籍（編年、傳記、職官、政書、類書、筆記、文集）を整理し、索引を作って語彙や制度の含意と推移を見きわめ、既成の假説をテストして全體に條理を通すという、根氣を要するプロジェクトが求められる。一九五〇年このかた、宮崎、佐伯教授がリードし、楊聯陞、田中謙二教授の參加を得てつづけられたこの努力は、『長編』、『宋史職官志』、『宋會要職官』ほか、職官、書判、『朱子語類』などの典籍の整理を堅實にすすめ、一九六三年には『宋史職官志索引』（佐伯）、「宋代官制序説」（宮崎）という中間の展望が成り、この事業の中から、梅原、礪波護、衣川強教授[8]という次世代の俊秀の業績が育ったのである。[9]

卒業後三十年、土地、商業、財政、都市の大テーマそれぞれに斬新な解釋を披瀝し、現役の宋代研究世代の牽引者である梅原氏は、先輩教授の退休と前後して、右のプロジェクトを兼掌した。氏の手許に厖大な索引等の蓄積が歸したが、氏は新たに『夢溪筆談』などの筆記類、そして政書、類書、墓誌銘、列傳、文集、言行錄、書判を積極的に渉獵し活用する方向で新生面を開き、またこれまで閑却されがちであった『慶元條法事類』、『吏部條法』という資料源を生かすことで大きな知識の進歩をもたらした。こうした努力で俄かに可視的となった新分野は「昇進制」である。宮崎博士が「はしがき」で示しているように、官職の高下別、職能別の配分秩序が、はじめて鮮明で統一ある系統の構圖に明示されただけでなく、「功業」のさまざまにランクされたタイプを筆頭に、「家」、「富」の要素をもそれなりに配慮しつつ、キャリアー組とノンキャリアー組を官職ハイアラヒーに組みこみ、「廻遊」狀に昇進を誘導する仕組みが緻密に示され、しかも編年、傳記史料の驅使によって、選拔の諸基準や閲歷の順・不順という變數が、制度という常數にどう相關したかを、個人レベルに掘り下げ、制度の實效のほどを豐かに例證しているのである。つけ加えていうと、本書では「昇進制」と同じ密度で洞察が展開している譯ではないが、「選人の世界」、「恩蔭」、「保舉」、「官職の保有と配分における中央と地方」、「胥吏」、「監察」の議論を通じて、梅原氏は暗々裏に「官僚制の社會史」の地平開拓と數量分析の地盤づくりに貢獻を果しており、先輩世代の想定をこえた新しい歴史意識への反應が垣間見られるのである。

四

本文六二二頁の本書は六章から成り、一、二章は文武の寄祿官階、三章は差遣、四章は館職、五章は恩蔭、六章は胥吏を論じ、一、三、五章は既稿によりつつも、全文は新たな書き下しである。注の字數が本文字數の三分の一の比重をなす重厚なモノグラフであるが、文章が明快であるほか、大小八十七の表が隨處に分布し、一、二章では文字通り苦心の作というべき宋代選人・官人官階における敍遷の經路チャートが七つ收められ、卷末には要を得た索引も附されているので、讀者の理解を容易にしている。壓卷部分は一～五章の記述、ことに宋代寄祿官階と差遣を全面的に檢證した部分であり、たとえば孫國棟教授の『唐代中央重要文官遷轉途徑研究』（一九七八、新亞研究所）、何炳棣教授の『中華帝國の出世階段』（一九六二、コロンビア大）冒頭の清制の概述と比べても、トータルで詳密な點ではるかに徹底している。

さて、初めから三分の二の記述の主題排列は、寄祿官、差遣、館職という、元豐以後に落ちついた職官範疇を座標におきながら、宋

初からの制度の流れを明示する手法で書かれ、また「改革」の成熟時期を元豐から政和、大觀（一〇七八―一一一〇）にいたる三十年の幅でみることにより、文・武臣の位置づけの歸趨や、南宋に影を落してゆく職、蔭の濫授、制度全體の硬直と地方化を印象づける工夫が施されている。さらに、控え目に『宋史職官志』、『同選擧志』を土臺とした復元であると語られながらも、宮崎「序說」が職官志の章を逐った敍述であったのに對し、ここでは社會ピラミッドにおけるマスとエリートの接合の文脈に卽應させて、官人最底邊の選人とその改官（入流）から筆を起し、順次、京官、朝官、員郞、正郞、卿監、侍從、大兩省、使相、宰相へと溯り、職と蔭を通じて特權に及ぶ手法が採られている。一、二、三章は強く相關するので同時に參照されることが望ましい。

梅原氏の文臣キャリアー階梯を示す五つのチャートと選人の二表、差遣の記述に導かれて進むと、科擧の有出身を筆頭に、無出身、雜流などの、高下雜多な「メリット」にキャリアーを開く宋代職制の理念が、實質の制度保證をうけていたのは、從六品以下（員郞以下）であったらしく、一任づつすすむ常調では縱橫にジグザグなラダーが設けられ、有出身で太常博士（從七品）まで改官後十～十二年、無出身で國子博士（同）まで二十年を要し、一方、正六品以上では出身の有無がより大きく響いたらしい。かりに三十六歲が進士及第の平均年齡[10]とすると、幸運な彼らも大半は官階の中下層に滯留したはずであり、まして無出身、雜流出仕の者は朝官・京官・選人上層の部分に犇めき、この層位に官人の平均像があったとみてよい。

この平均官人像を鮮明にするには、ぜひ科擧と學校の推移への一瞥がほしいが、本書では缺けているので、チェイフィー、李弘祺氏の勞作の參看を勸めたい。それにしても本書の選人分析は有益である。ここでは四等かつ七階に成層狀に整序された選人が、供給サイドの有出身、無出身、雜流という資格條件、そして需要サイドの三京から州縣に至る幕職州縣官の對應ランク、京・州・縣ポストの戶口、繁簡、遠近、善惡規準に照して、ポストを配分される構圖が示される。明示された映像はかなり複雜であり、明暗の縞が目だつ。武臣も含めて初級官人事の運營を見ると、善闕の知縣―通判―知州―提刑―轉運という陽の當る職が有出身選人に、要害邊州の職に武臣が、財政末端の監當職に武臣の三班使臣が起用されているところに人材主義の妙を知る反面、時を逐って過剩化する京朝官ストックを處するべく、中書の堂除人事が吏部闕人事を侵し、大半の知縣闕、中原はじめ四十～五十の大州の知州・通判闕が高官の出外出鎭に向けて留保され、この優良ポスト爭奪から疏外された惡弱・僻遠の闕を埋めたものが無出身、恩蔭、武臣、宗室の子弟であったことが知られる。

この機能障害を補完的に救う裝置として編み出された中書の堂除、邊僻地方官の攝官、定差、奏辟、そして選人改官、京朝官昇任の際の薦擧（保擧）は、「才の選拔」に副次の選擇肢を供したであろうが、宋初に揭げた「公」理念がむしろ回避してきた「ネットワーク」を再導入するものではなかったかと思われる。ともかく、親民官を重んずる宋の政術（ステイトクラフト）とはうらはらに、良闕を除く州縣の職は額面通りの人材主義が通用する場ではなかった。衣川敎授の力作である俸給の問題が、この局面を深め、行政の效率を占う上で參照されて然るべきである。

五

冗官のゆえに待闕が十年にも及び、たとえ堂除されて三十歳で知縣職を得ても、七十の退休まで四任どまりという事例を念頭において、選人が磨勘改官または試秩をへて高級官に進んだのちの敍述を讀むと、梅原氏が再三にわたって有出身、無出身（恩蔭・雜流）の別、進士の中の狀元以下三元、員郎から侍從にかけての館職に關係づけて、キャリアー組、ノンキャリアー組の、いわば特急、急行、普通の昇進ルートを說いている理由が一そう判然と分る。すなわち常調の進士や異才の雜流出身者の出世は、朝官かせいぜい員郎止まりであり、格別の場合でも太中大夫(從四品)で頭打ちとなる。宰相クラスまで登りつめることは、神話にも近い特例であり、まず初仕から將作監丞（從八）または太子中允（從八）に拔擢され、超資コースに入って臺諫官、員郎、左右諫議大夫（從四）、給舍、侍郎（從三）と上り、この閲薦擧、優良差遣、館職が與えられることで高級官への進路が一そう確定するのである。

この出外の優良差遣には、知縣—通判—知州—監司と進み、以下郎官、侍從、執政と進むモデルケースがある。ここで、提刑—轉運の監司から、三司使—樞密使、又は參知政事—宰相と進むコースが北宋中期まであり、R・ハートウェル教授の解釋では、五代の遺制としての大族の裔と稱する一群のエキスパタイズ、ことに財政專門職のそれが、財務官僚を軸にして結婚政略、保擧、蔭補、科擧を操作して有力な小集團をつくり、科擧の理念をある程度骨拔きにしたが、徽宗朝を境にその獨占力を弱め、勢力も局限されてゆくという展望を示し、北宋前半について富と家の絆の影響力を高く評する立場をとっている。[11] 梅原氏は三司系の差遣については礪波氏がすでに扱ったためか深入りせず、『十朝綱要』の表を分析して、超エリート昇進階梯で宰相まで達した三司使系の者は全體の四分の一であり、本命コースは知制誥、臺諫、翰林學士を踏み臺としたと斷じている。この問題は官僚制の理念とメリット基準との推移を知り、そのクロノロジーないし時系列を立てる上で深刻であるから、別個に詳說されて然るべきと思う。

王安石が吏士合一に合せて、官職を有能の士に開くことを唱えながらも、舊法黨の流品意識が反撥して、正六品以上人事で出身の有無を辨別し、ためにトップエリート人事が宋末にかけて硬直するという氏の展望は新舊法黨交替に卽して筋が通っているものの、なぜ南宋の閥族集團のサイズが北宋ほどのネイションワイドの規模でないのか、一體、宋代での獨裁制の確立期はいつなのか、はまだはっきりと定說を得ているわけではない。新刊のハイムズ氏の著述の一讀を讀者にもすすめる次第である。

六

武臣の官階については、傳記が少なく復元困難な分野である。全體の一～二割の職業軍人のほか、財務職員、末端の知州縣、提刑、巡檢を含む武臣集團は、藩鎭という超「指令」的秩序の所產でありながら、「慣習」秩序に根を張るわけではなく權力者の祕書・側近であるので、プロテジーの對象になりやすい。この點で宗室、宦官、有力者の子弟も武臣の有力な構成要素である。本書ではこうした雜多な內容の武臣集團が、文官寄祿官階の形成とズレをみせながらも、政和の改革までに、a文階の卿監以上、b員郎、c朝官、d京

官最上位、e選人と京官という序列にほぼ釣合う形で、a′遙郡・正任、b′諸司使、c′諸司副使、d′大使臣、e′小使臣と整序され、さらに文臣の館職に當る閣職、兩制に當る横行が設けられたものの、なお全體に文臣に附隨する不透明な外郭集團として殘り、元以降は唐制に從った整理に服するという、經過措置の性質を帶びていたことが示されている。

武臣は昇進が遲いながらも優俸を給され、軍事の要衝ポストや邊遠州縣官、監當官、さらに監司—樞密使のキャリアー、外交使節、治河・恤災の職に起用され、恩蔭濫授の對象でもあり、總數はつねに文臣を上廻ったとされる。こうした記述を讀むと、極力小サイズでコンパクトな文臣集團を養成し、集約的な行政の飛び地を點と線で結んだ文治の構圖のなかで、行政の密度では粗放ながらも直接監視と統制を要する部分は、武臣で一括される側近集團の配置で相補されたとみてよいのではなかろうか。武臣の配置が特殊具體的な狀況の解決に向けられているとすると、外交、邊防、羈縻、治安、內務、軍制、總領所などの廣い關連問題の相位が拓かれ、その文脈の中で武臣の役割が詰められてゆかないと、その比重の判定も明らかではなく、別個獨立の考察を要するジャンルである。

七

第四章の館職の敍述は、昇進制の要所を抑える重要問題であり、包括的かつ體系的敍述としては本書が最初である。まず館職の系列が、a、三館祕閣系列の由緒から生れ、高官の推薦や召試をへて選任され、資料編纂に當りつつ將來を囑望されるグループ、b、侍從の處遇として、また宰執へのステップとして文化的側近に擬せられるグループ、c、最高級官の帶職または榮譽號、また經筵の官に預るグループが示される。さらに館職が差遣とリンクする貼職が述べられ、單に中央に人材をプールするだけでなく、內外官、特定地方官に特別のキャリアーを保證するいみで行なわれたという指摘がある。任用對象は元豐前には正途進士に限られ、員郎級の知州、漕司に枠を絞ったが、やがて枠が擴がって濫授に傾き、恩蔭、無出身にも與えられてゆくが、全官員の數パーセントがこれに預ったにすぎないという。

梅原氏が帶領館職頻與への傾斜を仁宗期に關連づけているのは卓見である。この時期は官制、科擧、學校ともに整い、また念願の平和の達成が文治に活性を與え、邊境要州に俊秀を配して文化優越を示した時であった。さらにつけ加えれば、この頃、南北の進士生產量が拮抗し、三年一試の定制が定まってきたから、文臣制の課題は以前のように氣前よく進士を創るよりは、すでに萌した冗官に對處して、特定の機能の遂行や、それに應ずる特權の享受を許される限りで權利化して、守成の體制を操縱する方向に傾いたのであろう。

第五章の恩蔭の研究も、館職とは別に生じた特權の配分・享受の敍述である。この章も觀察の周悉において特筆に値する。梅原氏は任子の歷史は古いが、この制の整備された運用において宋代は特色的であるとした上、聖節、致仕、遺恩、大禮を機に生ずる恩蔭授與者の範圍、數量を詳考し、徽宗代から南宋への濫授、仁宗以降の皇親、外戚系の任子の增加をのべ、さらに蔭補人の初任狀況、昇進のルートと有出身キャリアーとの差、任子や諸科から出身に轉ずるための鎖廳試に說き及んでいる。結局、任子は寵遇のためだけでなく、特權と勢力の相續の重要な柱であり、また邊闕、監當、巡檢闕

を埋めた上に、高官への進出もある程度まで許した。ここで氏は新しい「官僚貴族」の誕生を示唆するのである。

この問題への解釋は目下のところ二つに分れている。K・ヴィットフォーゲル、青山定雄博士が北宋期の高官に閥族形成を見て一石を投じて以來、R・ハートウェル、H・ビィーティ、R・ハイムズ、[13] L・ウォルトン[14]教授らは、官界をとりまくネットワークや社會層位に注目してきた。明・清になると、大地主上層に位するエリートの血縁集團が社會を寡占し、彼らが地位保存と繼承に巧みなために、この層から有力官僚が輩出したと考える。反面、宋代では前代からつづく大族の裔が結婚政術で科擧制を骨抜きにして徽宗代まで生き抜き、徽宗の政策と靖康の難、南渡の餘波で中小族に地位を替られ、蔭の效用にも限界を生じたと展望する。これに對し、E・クラッケ、何炳棣、J・チェイフィー教授は科擧によるモビリティを重んずる。結婚が及第の前提を築くにせよ、科擧をめざした教育への投資や沒入の意義は大きく、また最初の出仕を拘束したものは結局科擧であった。科擧の下では族の絆にも競合の價値觀が割りこむ一方、たとえストレートな昇進が神話であっても、科擧と學校が正統の上昇徑途である限り、普遍的に社會價値を統合するその役割は變らないという。

ここで再びヒックス教授の論法を借りて整理すると、トインビー流の「挑戰」壓力が鎭靜すると、古典官僚制の組織は慣性の法則、一種の社會引力で支配され守成に入る。特定の職や特權を相續させ、世襲させることでこの引力は操縱されなければならない。評者はこの操縱は結局は成功したと見たい。すなわち世襲貴族制は再生せず、カーストによる職業の專門化も現れず、また都市がおこり大商人が輩出しても、結局は官界への同化（アシミレーション）が出世の本命であった。[15] 女直、モンゴル、滿洲族の「挑戰」も、明末清初の人口爆發も、科擧と昇進制の根づいた社會を崩すには至らなかったように思える。

八

終章の胥吏研究は、史料的にも命題的にも、經過的に重要な問題提起という性質を帶びている。すなわち、これに先立つ敍述の方法と史料密度でこれに迫ることは、先行研究の偏りもあって、むしろ困難に屬する。梅原氏はこれを率直に認めた上で、一方では地方官制に配置された胥吏の職種、數量の平均像を復元し、他方で中央官署の胥吏の由來、職制、昇任、人事、恩蔭、出職を詳說し、研究の缺を埋めている。宋代以降の歷史について先學の下した「獨裁政治」のラベルの印象が餘りにも強いので、新しく問題にとり組むためには、近年に自覺されてきた行政の地方主義への傾斜を理解するに役立つ瞿同祖教授の『清代の地方政府』（一九六二、ハーバード大、六九、スタンフォード大）、J・ワット教授の『後期中華帝國の知縣』（一九七二、コロンビア大）のような集中限定した問題への取り組み、そして佐竹靖彥教授が試みた官箴の分析、に關連づけて深められてゆくことが望ましく思える。

以上、甚しく評者の關心に引きつけて、しかも印象的に素描した紹介と評は、この記念碑的な大業の重厚な中味を正確に捉えず、讀者に本書の眞髓を傳えていないことは、自から自覺するところであり、筆者と讀者の寬恕を乞いたい。無辭を重ねて恐縮であるが、最後に全體の印象として感じた一、二の點を附記して江湖の教示を

仰ぎたい。

大方の研究者は、中國の官僚機構のサイズが厖大であると想定し、しばしばそれを制度や機能の效率性と相關させて説くが、果してそうであろうか。かりに官五萬、吏三〇萬という數が宋以後の目安とすると、一億から果てには四億の人口の中で、それはむしろ小さな政府である。では人口增に合せて行政經費がふえ、地方主義が增す中で、官職數も行政都市數もコンスタントであったとすると、官僚制が社會と均衡し、世襲貴族の形成が阻まれたのはなぜか。一つの推測は科擧制と昇進制が供する文化價値による統合を考えるであろうし、また「收入經濟」（ヒックス）の枠内で慢性化する職員不足、給與不足に對し、社會ネットワークが補完の役を果したとも考えられる。もしこうした想定に何がしかの意義があるとすると、當面の宋代官僚制が獨裁政治のタイプに屬することに一應異議はないにせよ、その機能を占うについては、刻々と變化する社會の動態、空間の狀況ごとにニュアンスの異なる行政の內容や役割について、社會史的背景を詰める作業が求められるのではないだろうか。

終りに若干の印刷上のミスを擧げると、vi 一行の「すす→す」、xxiii 三行の「史→吏」、「宿→辰」、七七頁八行の「大→太」、二二四頁一四行「神→福」、五六五頁一三行「。→、」が目につき、また一四頁の第二表は、手を入れてヨコに組み直していただいた方が行文を理解しやすい。本書の諸テーマに專念されてから十餘年にして、これほど斬新で深い貢獻にまとめられた梅原氏の研鑽に敬服し、上梓を慶祝するとともに、本書が內外の研究者の必攜書として熟讀玩味されることを衷心願って筆を擱く次第である。

註

（1）*Journal of Asian Studies*, Vol. 46, No. 1 (1987), Linda Walton の書評參照。

（2）Ira M. Lapidus, "Hierarchies and Networks: A Comparison of Chinese and Islamic Societies," in F. Wakeman Jr. (ed.) *Conflict and Control in Late Imperial China*, Univ. of California Press, 1975.

（3）Jürgen Kocka (Hg.), *Max Weber, der Historiker*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1986.

（4）Mark Elvin, "Warum hat das vormoderne China keinen industriellen Kapitalismus entwickelt? Eine Auseinandersetzung mit Max Webers Ansatz," im W. Schluchter (Hg.), *Max Webers Studie über Konfuzianismus u. Taoismus*, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main, 1983.

（5）J・R・ヒックス、新保博譯『經濟史の理論』日本經濟新聞社、一九七〇、三一～四一頁。

（6）J. M. Menzel, *The Chinese Civil Service*, D. C. Heath & Co. Boston, 1963.

（7）J. K. Fairbank, E. Reischauer, A. Craig (Co-auth), *East Asia: Tradition and Transformation*, George Allen & Unwin Ltd., 1973, p. 105.

（8）礪波護『唐代政治社會史研究』東洋史研究叢刊四〇、同朋舍、一九八六。

（9）衣川強「宋代の俸給について—文臣官僚を中心として—」

東方學報京都四一、一九七〇。『宋元學案』宋元學案補遺人名字號別索引』京都大學人文科學研究所、一九七三。

(10) J. W. Chaffee, *The Thorny Gates of Learning in Sung China*, Cambridge Univ. Press, 1985, p. 171.

(11) R. Hartwell, "Community Elites, Economic Policy Making and Material Progress in Sung China (960—1279)," Paper Presented for the CISS-CSNA Workshop on the Sources of Asian History and the Generation of Quantifiable Historical Indicators, Toronto, Feb. 1976. "Demographic, Political and Social Transformations of China, 750—1550," *HJAS*, Vol. 42 (1982), pp. 365—442. "Financial Expertise, Examinations, and Formulation of Economic Policy in Northern Sung China," *JAS*, Vol. 30 (1971), pp. 281—341. "Kinship, Status and Region in the formal and informal organization of the Chinese Fiscal Bureaucracy, 960—1165 A. D.," Paper Presented at the Annual Meeting of the Social Science History Association, Ann Arbor, Oct. 1977.

(12) H. Beattie, *Land and Lineage in China: A Study of T'ung-Ch'eng County, Anhwei in the Ming and Ch'ing Dynasties*, Cambridge Univ. Press, 1979.

(13) R. Hymes, "Doctors in Sung and Yuan China: A Local Case Study," Paper Presented to the Columbia Univ, Seminar on Traditional China, March, 1981. *Statesmen And Gentlemen: The elite of Fuchou, Chiang-Hsi in Northern and Southern Sung*, Cambridge Univ. Press, 1986.

(14) L. Walton-Vargo, "Education, Social Change, and Neo-Confucianism in Sung Yuan China," Ph. D. Dissertation, Univ. of Pennsylvania, 1978.

(15) Marwyn S. Samuels, "The City in Late Imperial China," Review Article, *JAS*, Vol. 28. 4. 1978.

一九八五年二月 京都 同朋舎
A5版 xxiv+六二三頁 二二、五〇〇圓